

重要文化財
【建造物】

きゅう わ う け け ば か
旧和宇慶家墓

指定年月日／2000（平成12）年5月25日
所在地／大川127-1

国指定



旧和宇慶家墓は、長田大主^{な-た-ふ-ず}を太宗とする長栄姓^{ちやうえい}の流れを引く玻武名家^{は-ん-な-や-こ}5世信茂の第2子真邦を祖とし、18世紀後半に頭職を出した名家の旧墓である。

墓は、墓室部、内庭、外庭の3つの空間に分けられる。外庭は最も広く、袖垣によって囲われている。内庭とは高さ約2mの石垣によって仕切られるが、中央に設けたアーチ門を通じて出入りできる。墓室は自然の岩陰をさらに掘削して奥行きを広げたもので、中央に組合せ式の石棺が1基安置されている。墓室入口と岩陰全体は石積みにより閉ざされるが、正面中央部に小型

のアーチ門を設けている。アーチ門には縦格子をもつ板石がはめ込まれており、開閉はできない。墓と石垣には、漆喰が残る箇所がみられることから、かつては全面に漆喰が塗られていたと思われる。

和宇慶家の伝承によれば、玻武名家7世石垣親雲上信明が、1647年に風水師・古波蔵親雲上の意見を取り入れて石城山麓^{いしすくやま}に墓（ハンナー主の墓）を築造・移転したため、玻武名家の分家である和宇慶家が旧墓を譲り受けたとされる。本墓は独特な意匠を有するばかりか、墓室入口の構造から一人の被葬者のために築かれたものと想定できる点など、墓制史上きわめて貴重である。

記念物
【史跡】

か び ら か い づ か
川平貝塚

指定年月日／1972（昭和47）年5月15日
所在地／川平238・外



川平貝塚は、1904（明治37）年に鳥居龍蔵氏によって県内で初めて発掘調査が行われた遺跡である。貝塚は、仲間盛と獅子盛を含む一帯の畑や原野に形成され、出土遺物から14～15世紀頃の遺跡とされている。鳥居は、調査の翌年（1905年）に調査概要を記した「八重山の石器時代の住民に就て」を発表した。その中で、獅子森の遺跡（現・川平貝塚）から出土した把手の付いた土器を「外耳（そとみみ）土器」と名付け、沖縄本島を含め、他の地域では発見されていないことを述べ、台湾など南の島々との関連を示唆した。

しかし、鳥居は1925（大正14）年、先に主張した説を大きく変え、八重山の遺跡から出土する土器の形式は日本固有の弥生系であるとした。鳥居の主張が大きく変わった背景には弥生土器の発見があり、縄文土器に比べ無文化が進んだ弥生土器に、八重山の土器との共通性を見出したと思われる。しかし、鳥居は晩年発表した著書で、八重山の土器の製作形式と台湾紅頭嶼ヤミ族の現今製作土器との類似性を述べ、改めて南の島々との文化的関係に思いをはせた。なお、鳥居が名付けた土器の呼称は、現在でも「外耳（がいじ）土器」として八重山考古学で一般的に使用されている。